

労働価値説と史的唯物論の成立

——ローゼンベルグ『初期マルクス経済学説の形成』によせて——

松 田 弘 三

一

『資本論註解』（一九三一年）、『経済学史』（一九三四年）の著者としてわが国にも知られている、デ・イ・ローゼンベルグ（*J. H. Rosendorp*）の遺著『十九世紀四〇年代におけるマルクスとエンゲルスの経済学説の発展の概説』（*Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в союзовое годы XIX века*, 1954.）が、『初期マルクス経済学説の形成』の標題で副島種典氏によって翻訳された。（一九五七年五月、大月書店刊）この労作は、

ソ同盟科学院経済学研究所長ウエ・ヂャチェンコによつて、不振をきわめるソ同盟におけるマルクス主義経済学研究のほとんど唯一の成果と評価されたものである。（ヂャチェンコ「経済学分野における科学的研究活動の任務について」、『経済評論』一九五二年四月号、一九一—二ページ参照）

本書は、マルクスとエンゲルスの経済学説の形成と発展の全過程を研究することを企図して著者が着手した大なる研究の第一部であつて、のこりの仕事は一九五〇年二月の著者の死によつて中断された。したがつ

てここには、一八四〇年代におけるマルクス主義経済学の生成期の研究のみがふくまれているのであるが、

二

しかしたんなるその「概説」ではなくて、一つの重要な問題提起がなされているようにおもわれる。それは、マルクス主義経済学の土台をなす労働価値説さらには剰余価値学説が、マルクスとエンゲルスによる史的唯物論の成立にもなつて、いかに形成されてきたか、という問題にたいする独自の見解である。（なお、

この労作が経済学研究所の拡大学術会議で審議され、その過程で表明された要望にこたえて一連の補足がなされたという事実からみて、この見解はソ同盟経済学界の承認をえたものとおもわれる。）

以下においては、ローゼンベルグの提示した問題点を、できるかぎりマルクス・エンゲルス自身のことばによつて要約し、著者の見解をあわせしめすととも、若干の私見をのべたいとおもう。

いうまでもなく、マルクス主義経済学の出発点は、

『独仏年誌』(Deutsch-Französische Jahrbücher 一八四四年二月刊)にのせられた、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』(Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie 一八四三年一二月執筆)であつた。一八四二年十一月イギリスに渡りマンチエスターの紡績工場に勤務することになつたエンゲルスは、この資本主義の祖国において、近代社会の構造の究明をすすめることによつて、新しい歴史観に到達した。彼みずからの語るところによれば、――「わたしがマンチエスターでいやでも気づかざるをえなかつたのは、いままでの歴史記述においてなんの役割もはたしていないか、あるいはつまらぬ役割しかはたしていないところの経済的事実が、すくなくとも近代世界においては決定的な歴史的な力だということである。それがこんにちの階級対立のおこ

る基礎であるということである。さらにこれらの階級対立こそ、大工業のおかげでこれらが十分に発達している国々、したがってとくにイギリスでは、政党の形成、党派闘争の、したがってまた全政治史の基礎だといふことである。」(F. Engels, Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten, 1885, Marx-Engels Ausgewählte Schriften, Bd. II, S. 319. 邦訳『マルクス・エンゲルス二巻選集』第二巻、二六四ページ上)という見解である。このような社会観を抱くにいたったエンゲルスが、ただちに(一八四三年の五月ごろから)経済学の研究——したがってまた従来の経済学の批判——に着手にするにいたったのは当然のなりゆきであった。

もつとも、右の歴史観＝社会観は、けっしてエンゲルスひとりのものではなかった。彼とは別個に、「マルクスはこれと同一の見解に達していたばかりでなく、すでに『独仏年誌』のなかで——(『エダヤ人問題によせて』(Zur Judenfrage 一八四三年九月一〇月執筆)および

『ヘーゲル法哲学批判序説』(Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung 一八四三年二月執筆)において——筆者——これを一般化していた。すなわちそれによれば、「一般に国家が市民社会を制約し規制するのではなくて、市民社会が国家を制約し規制するのであり、したがって政治とその歴史は経済的諸関係とその発展から説明されるべきであって、その逆ではないことになる。」(a. a. O., S. 319-20. 訳、二六四ページ上)しかしながらマルクスはこのころまで、主として近代社会の法哲学的研究にたずさわっていたのであって、彼が経済学の系統的研究にとりかかるのは、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』に刺戟されて、一八四四年になってからのことであった。ここに、マルクス主義経済学の端緒としての『国民経済学批判大綱』の意義がある。

さて、問題は、この『国民経済学批判大綱』における価値論である。エンゲルスは、こんにちの社会を私

的所有の支配する社会として特徴づけ、この「私的所有の最初の結果」が商業であり、商業は、重商主義的独占のもとでも、自由通商のもとでも、「合法的な詐欺」ないし強奪であるとみなしている。したがって、商業の拡大の自然的結果たる国民経済学（『ブルジョア経済学』は、たんなる「致富学」であり、私的所有を弁護するものにすぎない。

ところで、「商業によって条件づけられる第一の範疇は価値である。」（Marx-Engels-Jenin Institut, Marx-Engels Gesamtausgabe, I. Abt. Bd. 2. ——以下 MEGA, I/2 と略す—— S. 389. 邦訳、『マルクスマーヘンゲルス選集』補巻の二〇四ページ）エンゲルスによれば、経済学者は、「抽象価値もしくは真実価値」（*abstrakten oder realen Wert*）と「交換価値」（*Tauschwert*）または「商業価値」（*Wert im Handel*）とこう「二重の価値」をもっている。抽象価値または「真実価値の本質については」、「物の抽象価値は生産費によって決定されると、主張する」

ところの「イギリス人——とりわけマカロックとリカード——」と、「この価値を物の効用によってはかることを主張したフランス人セーとのあいだに、ながい論争があつた。」（*ca. a. O.*, S. 389. 訳、二〇四—五ページ）しかしこの論争はいままでのところ決着がついていない、というのである。ここに「抽象価値もしくは真実価値」とはなにを意味するのか。「真実価値」は古典経済学——リカード——にもみられる概念である。すなわちそれは、交換価値と対立しそれを基礎づけるところの、その本質としての価値にはかならない。ただしエンゲルスは、つぎにみるように、これを一つの抽象と解しているのである。

右の相對立する二つの価値論にたいするエンゲルスの批判は、つぎのとおりである。まず、抽象価値を生産費によって規定するリカードらの見解については、「なぜ生産費は価値の尺度であるか？……なぜなら、普通の状態だったら、そして競争状態を度外視し

たら、誰もある物を、その生産に要した費用よりもやすく売りはしないだろうから。——売りはしないだろうだって？ 商業価値を問題にしないこのばあいには、われわれに『売ること』がなんの關係があるか。われわれがまさに論外にすべき商業をすぐまたここで問題にしているではないか、——しかしこれはなんとこの商業であろう！ 主要点たる競争關係を考慮にいれてはならない商業なのだ！……競争が問題にされなくなるやいなや、生産者がその商品をちようにその生産費で販売するどんな保証もなくなるということを、いったい経済学者はぜんぜん考えないのであろうか？」(a. a. O., S. 385-6. 訳、二〇五ページ) けれど、「かりに、ある人が絶大な努力と莫大な費用をかけて、なんの役にもたない物、誰もとめない物をつくったとする、——それでもそれは、生産費だけの価値があるだろうか？ ぜんぜんない、と経済学者はいう、誰がそれを買うことをぞむだろうか？ したがって、わ

れわれは突然、たんに悪評あるセーの効用ばかりでなく、さらに——『買うこと』ともに——競争關係をもあわせもつことになるのだ。……すなわち、経済学者は、自分の抽象を一瞬間も固持することはできないのである。彼が遠ざけようと努力しているものすなわち競争だけでなく、彼が攻撃しているものすなわち効用も、刻々はいりこんでくる。抽象価値とその生産費による規定とは、まさしく抽象であり背理であるにすぎない。」(a. a. O., S. 386. 訳、二〇五—六ページ) そればかりではなく、「彼〔『経済学者』〕は競争を考慮にいれずに、どういふふうにして生産費を規定しようとするのか？ われわれは生産費を研究するさいに、この範疇もまた競争に基礎をおいていることを知るであろう。」(a. a. O., S. 386. 訳、二〇六ページ)

だがセーの効用価値説も「おなじ抽象」である。「物の効用は、ある純主観的な、絶対に決定することのできないものである、——すくなくとも、まだひとが対

立関係のなかをさまよっているあいだは確実に決定することのできないものである。……物の効用の大小について、ある程度客観的で、表面上一般的な決定にたつする唯一の可能な方法は、私的所有の支配のもとでは競争関係である。……だが競争関係が容認されるならば、生産費もまたはいりこんでくる。……したがって、このばあいにも、対立関係の一方が、心ならずも他方に移行する。」(a. a. O., S. 386-7. 訳、二〇六ページ)

要するに、ローゼンベルグがのべているように、「エングルスは、真実価値にたいするどちらの規定をも排したばかりでなく、真実価値の存在そのものを否定している。その理由は、第一に、これらの規定は両方ともきわめて純然たる抽象であって、リカードは効用を忘れ、セーは生産費を忘れているからである。第二に——そしてこれをエングルスはとくに強調しているが——生産費も効用も、競争から抽象することはできないからである。ところでもし競争を考慮にいれると、

もはや真実価値が存在する余地はない。なぜなら、競争によって決定されるものは、交換価値または価格にほかならないからである。」(ローゼンベルグ、副島種典訳、『初期マルクス経済学説の形成』、六一—二二ページ)

「私的所有が支配しているもとはは価値を競争から抽象することはできない」というエングルスの考えは、「貴重な実りゆたかな」(同書、六二ページ)ものであったが、しかし彼が価値を否定したことは誤りであった。「しかしエングルス自身にも、マルクスがやつとのちにあきらかにした、市場価格と価値との内的関連がはつきりしていなかったため、彼は誤った結論に到達した。すなわち、彼は価値の存在を否定したのである。それにもかかわらず、エングルスの大きな功績は、競争の自然成長的な破壊的な性格を、競争の基礎自体すなわち私的所有によって制約される、その内在的性質とみたことにある。」(同書、六二ページ)

以上のローゼンベルグの見解は、さきのエングルス

からの引用によって十分に裏づけられているとおもわれる。

しかしながら、ローゼンベルグは、「価値とは、生産費の効用にたいする関係である。」という、エンゲルスのきわめて注目すべき思想に触れていない。エンゲルスはいう。「物の価値は二つの要素をふくんでいるが、これらの要素は、論争の当事者によってむりやりに、しかもわれわれのみたように、いたずらに分裂させられている。価値とは、生産費の効用にたいする関係である(Der Wert ist das Verhältnis der Produktionskosten zur Brauchbarkeit)。価値の最初の適用は、ある物を総じて生産すべきであるか。すなわちそのものの効用は生産費をつぐなうかという問題を決定することである。ついで、交換にたいして価値を適用することはじめて問題になりうる。」(a. a. O., S. 387. 訳、二〇六ページ)ところが、「すでにみたように、価値概念がむりやりにひきさかれて、その個々の側面のおのおの

が全体である、といいふらされている。(その結果)競争によってはじめからゆがめられた生産費が価値そのものとみなされなければならないし、同様にたんなる主観的な効用もそうみなされなければならない。」しかるに、「競争」は、「生産費にたいして効用を代表」し、「効用にたいして生産費をもちこむ」(a. a. O., S. 387. 訳、二〇七ページ)のであり、しかも「その効用は偶然や流行や富者の気まぐれに左右され、その生産費は、需要と供給との偶然の関係において上下する。」のであって、結局私的所有の支配下においては「生産費と競争との交互作用によって決定される」ところの「価格」(a. a. O., S. 388. 訳、二〇八ページ)は、本来の価値からいぢるしく背離するのである。これに反して、「私的所有が揚棄されるやいなや、現在のような交換は、もはや論ずることができない。そのばあいには、価値概念の実際の適用は、ますます生産にかんする問題の決定にかぎられるであろう。だがこれこそ、

価値概念の本来的領分なのである。」(a. a. O., S. 387. 訳
二〇七ページ)

ローゼンベルグが、「生産費の効用にたいする関係」としてのエンゲルスの価値概念を無視したのは、「当時リカードの価値理論を批判することに心をうばわれていたエンゲルスは、リカードの理論の貴重な核心を捨てさつて、それをセーの俗流理論と同列においてしまった。こうなつたのは、エンゲルスがまだ効用と生産費とを、価値を決定する二つの要因と考えており、そのため、エンゲルスは、リカードとセーのどちらも、価値を決定する要因の一つだけを考慮にいれるだけで他方を捨象しているとして、この二人を同程度に非難したからである。」(前掲書、六三ページ)という彼のことばからも察せられるように、このような価値概念になんらの積極的意義をもみとめえなかつたからであるとおもわれる。たしかに、この点にかんしてもエンゲルスの思想が未成熟であることは、否めない。そ

れは、『国民経済学批判大綱』において、彼が、空想的社会主義の影響からぬけきつておらず、資本主義のさまざまな経済現象を道徳的に非難し、また経済学者を一般に不道徳なものとみなして、古典経済学と俗流経済学との区別をつけていないこと。また彼が、価値論のみならず、たとえば地代論においても、従来の経済学者の二元的な規定を綜合・止揚することをめざしていること——すなわち彼は、「地代は、土地の收穫能力、すなわち自然的側面と、人間的側面すなわち競争との関係である。」(a. a. O., S. 380. 訳、二一七ページ)のとべている——などにつながるものとおもわれる。だがたとえ、彼の価値概念が未成熟であつたとしても、この問題は価値論の根本問題にかかわるものであるから、看過することはできない。

国際的にみてもおそらくもつとも詳細かつ周到な『国民経済学批判大綱』の研究とおもわれる、杉原四郎教授の『ミルとマルクス』(一九五七年二月刊)第一章

「マルクス経済学の発端」は、この点をつぎのように論じている。「『大綱』の価値論の積極的側面は、その商品、価値論よりもその基礎にある価値の本質論的把握にある。価値の本質を生産＝費用と消費＝効用との前者を基礎とする関係として理解する考え方は、「マルクスの」『神聖家族』……（補⑤二二六―七）や、『哲学の貧困』……（①二二二）やに相通ずるものであるし、さらには『資本論』……（III. 213）にも貫流するものといわなければならない。エンゲルス自身その『反デューリング論』のなかで、……将来社会における価値概念の妥当性（「にかんして」）『大綱』の参照を求めているのである。（S. 386 ④五一―四一五）価値が、より正確にはマルクスの所謂「価値決定」（III. 907）が、本質的には社会の欲望を前提しこれに関係する側面をもつと同時に一般的に人間社会に妥当する超歴史的な性格をもつものであるとすれば、『大綱』の価値論はこの点において、noch nicht という消極的評価とは反対に beinahe

schon という積極的評価をあたえられねばならぬ。（四一―二ページ）と。たしかに、マルクスが一八六八年七月一日づけのクーグルマンあての有名な手紙のなかでのべてるように、社会のさまざまな欲望における種々の量的に規定された生産物を提供するために、社会の総労働を諸種の生産部門に一定の比率で配分するという必要は、一般的に人間社会に妥当する超歴史的な自然法則であり、それはいわば経済の本質ともいふべきものである。だが、それをとくに価値の本質とみなすべき必然性はみとめがたい。価値法則は、この労働の比率的配分という自然法則が、商品生産社会において自己を貫徹する形態であるというのが、マルクス＝エンゲルスの最終的な見解だったのでないだろうか。（Marx, Das Kapital, Bd. I. Anhang, S. 838. 邦訳『マルクス＝エンゲルス二巻選集』第二巻、二六一―ページ、参照）それにしても、前掲のような価値本質観を裏づけるとおもわれる章句が、『大綱』をはじめとするマ

ルクス・エンゲルスの労作中にみいだされることは、慎重な検討を要請するものであろう。

それはともかく、『国民経済学批判大綱』においては、エンゲルスは、「価値と市場価格のあいだに矛盾をみて」、「前者は正義のあらわれであり、後者はその破壊だ」と考えたところの空想的社会主義者——とくにイギリスの社会主義者とはほとんど同様に、「まだ、価値からの価格の偏倚を価値の破壊と考へていた(ローゼンベルグ、前掲書、七六ページ)。それはつぎの一句に明白にあらわれている。「競争関係によつてもたらされる価格の永久の変動は、商業から道徳の最後の痕跡までも完全にとりさつてしまふ。価値は、もはや問題ではない。価値をきわめて重要視しているようにみえ、貨幣としての価値の抽象に特別な存在の名譽をあたえる制度——このおなじ制度が、競争によつてすべての内在的価値を破壊し、そしてすべての事物相互間の価値関係を日々刻々に変化させる。このような渦

巻のなかで、道徳的基礎に立脚する交換の可能性がどこにあるだろうか?」(a. a. O., S. 395 訳、二一八ページ)

三

一八四三年十月パリへうつつたのち、ヘーゲルの法哲学批判の仕事を完成すると同時に、さまざまな社会主義・共産主義思想を摂取し、さらに経済学の研究に着手していたマルクスは、一八四四年にはいると、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』に刺戟されて、(三月から)経済学の系統的研究にとりかかった。その最初の成果である、イギリスとフランスの経済学者の著作からの抜粋や要約とそれにたいする批判的評註をふくむマルクスのノートは、“Oeconomische Studien (Exzerpte)”と題して、一九三二年にマルクス・エンゲルス・レーニン研究所に於つて“Marx-F Engels Gesamt-ausgabe, Abt. I, Bd. 3”に発表された。著書の抜粋や要約がなされている経済学者は、つぎの順序にならん

でいる。(一)ンヤン・バアイスト・セー、(二)フレデリック・スカルベク、(三)アダム・スミス、(四)ダヴィッド・リカード、(五)ジェームス・ミル、(六)マカロック、(七)デステュット・ド・トラシー、(八)ピエール・ボアギユベール。マルクスがこれらの経済学者をちようどこの順序で研究していったという指摘はない。(だがそう推定される。)またノートがなされた日付もあきらかでない。しかしボアギユベールからの抜粋をのぞいては、一八四四年のものであるとみなされる。(とくにその大部分は八月までになされたものとおもわれる。)マルクスの批判的評註は、セーとスミスからの抜粋にはすくなくリカードからの抜粋にはかなり多く、ジェームス・ミルからの抜粋にはさらに多い。しかもリカードとミル——とくに後者——にたいする評註は、たんなる評註をこえて、マルクス自身の思想を展開した試論になっている(ローゼンベルグ、前掲書、七七一—八二ページ参照)。だからここでは、価値論に関係のあるこれ

ら二つの評註だけをとりあげる。

まず、リカードからの抜粋にたいする評註。リカードのつぎの命題——「労働は商品の価値の基礎であり、「市場価格は本来的な自然価格からの偶然的で一時的な偏倚である。」(Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Works of Ricardo, Vol. I, p. 88)——を引用して、マルクスはつぎのように批評している。「二一ページ「セーが註をつけた仏訳本の」で、リカードがいうには、彼が交換価値についてのべるときには彼はつねに自然価格をさしており、彼が一時のあるいは偶然的とよんでいる競争からくる偶然事を度外視している。国民経済学は、自己の諸法則により大きな一貫性と規定性をあたえるために、現実は無偶然なもの、抽象は現実的なものであると仮定しなければならぬ。」(MEGA, I/3, S. 502)

ローゼンベルグはいう。マルクスもエンゲルスと同様に、「ここではまだリカードの自然価格、すなわち

価値を否定して、彼の労働価値説をまったく排斥している。」彼らは、「私的所有の制度のもとでは価値は実在的意義をもたず、実在的なのは、競争によって決定される市場価格だけであると考えていた。」(前掲書、八六ページ)のである、と。この主張は、右のマルクスからの引用によって十分証拠だてられている。「マルクスもエンゲルスとおなじように、価値は別の生産関係のもとでは生産費によって決定されるようになるだろうと考えていた。たとえば、共同社会ではつぎのような問題が生じうる——どういう生産物を第一に生産すべきか？ 生産物はそれになりたいする労働と資本との支出をつぐなうか？」(ローゼンベルグ、前掲書八六七ページ)これはマルクスのつぎのことばによっている。「国民経済学ではもはや市場価格しかあつかわないから、物とはもはやその生産費と関連させては、また生産費は人間と関連させては考察されず、生産全体が商売と関連させて考察されるのである。」(a. a. O., S. 502)

「マルクスはさらに、私的所有が支配するもとでは土地所有者と資本所有者に貢物をおさめなければならぬという理由からも、リカードの労働価値説はうけ入れられないと考えた。この貢物は商品の購入にさいして、利潤と地代というかたちで支払われる。したがって、貢物のどちらの部分も、商品価格の構成要素として価格のなかにはいつている。」(ローゼンベルグ、前掲書、八七ページ)この解釈は、リカードからのつぎの要約——「労働は……すべての価値の源泉であり、その相対量は……諸商品の相対価値を規制する尺度である。」(cf. *ibid.*, p. 13)にたいするマルクスのつぎのような批評にもとづいている。「リカードは、資本もまた労働であるから、労働は価格の全総和を包括すると説明している。セーは本書二五ページの註で、リカードはただで提供されるのではない資本と土地との利潤を忘れたのだ、と指摘している。ブルードンは、そこから正当にもこう結論している。私的所有が存在すると

ころでは、物の価格はその価値よりも大きい、これすなわち、私的所有者への貢物である、と。」(MEGA, I/3, S. 494)マルクスもここでは、資本主義社会にかんするスマイスの構成価値説の流れをひく、俗流的生産費説に囚われていたとおもわれる。

そこでローゼンベルグはつぎのように結論している。「このように、マルクスは、第一に、私的所有とそれによつて条件づけられる競争とが存在するもとは、実在的なのは市場価格だけであること、第二に、同一の前提のもとでは、私的所有者が支払を強制する貢物も価格構成の要素であることを理由に、リカードの労働価値説を拒否した。」(前掲書、八七ページ)と。

マルクス・エンゲルスといえども、最初から労働価値論者であったのではない、というローゼンベルグの指摘はきわめて重要であるとおもわれる。では、なぜそうであつたのか。「私的所有が支配するもとは、

交換は不可避的に自然発生的性格をもつ。彼ら〔マルクス・エンゲルス〕は当時、このような社会では、価値は、競争によつて直接に決定される価格のうちには発現しえないと考えていた。このような思惟行程のもとでは、マルクスが、エンゲルスのあとにつづいて、リカードの価値論を、現実に対応しない抽象とみたのも、不思議ではない。マルクスとエンゲルスは、このような抽象は政治的に有害なものと考えた。なぜならこの抽象では『現実』が美化されているから——交換は協力の妥当な表現であつて、この協力の参加者はすべて等しい利益をひきだすかのような幻想がつくりだされるから——である。」(ローゼンベルグ、前掲書、八八ページ)この見解は、『国民経済学批判大綱』におけるエンゲルスのつぎのことばによつても証拠たてられる。「真実価値と交換価値との相違の基礎にはつぎのような事実がある、——つまり、ある物の価値は商業のさいにそれになりたいしてあたえられるいわゆる等価物

とはちがつているということ、すなわちこの等価物はなんらの等価物でもないということが、それである。

このいわゆる等価物は物の価格であつて、もし経済学者が正直なら、彼は、このことを、『商業価値』のかわりにもちいるであろう。だが、商業の不道徳性がありにはつきりとあかるみにでないように、彼はやはり価格は価値ととにかく連関しているという外見の痕跡をすくなくとも保持しなければならぬ。」(MEGA, I/2, S. 388. 『選集』補巻5、二〇八ページ)

だが、ここでは誤りそのものが、正しい基礎から生じたのであつた。「マルクスは一挙に価値の問題の正しい解決に到達したわけではなかつた。彼はこの問題の検討を私的所有とそれに条件づけられる諸結果とを捨象してはならないという命題からはじめた。はじめこの命題は、ブルジョア社会で労働価値説を適用しうることを否定する方向にむけられていたとはいへ、しかしすでにこの命題のなかで、正しい価値理論をうち

たてるのになくはならないことがとくに力強く強調されている。すなわち、そもそものはじめから私的所有の役割を考慮することなしには、正しい価値理論をうちたてることのできないのであるが、マルクスはその私的所有を、なにか自然によつてあたえられたものとしてではなく、歴史の産物とみていた。ところで、所有と、それがブルジョア社会でとる形態との発生および発展を研究すると、私的所有の支配は労働価値と矛盾しないことがわかつた。」(ローゼンベルグ、前掲書、八八―九ページ)

労働価値説の否定から肯定へのこのマルクスの移行を推進したものの、それはまさに史的唯物論の形成であつた。「労働価値の否定からその肯定への道を、マルクスはかなり短期間に――彼が史的唯物論の基礎をきづいた期間のうちに――通過した。マルクスが労働価値を完全にみとめて剰余価値説の端緒をひらいた著書『哲学の貧困』は、『ドイツ・イデオロギー』――弁証

法的唯物論の諸命題が社会の歴史におしおよぼされている、すなわち史的唯物論がしあげられている労作——のあとではじめて出現したし、また出現しえたのである。」(前掲書、八九ページ)われわれは以下において、このことを文献的にあつづけるとともに、史的唯物論の労働価値説にたいする関連をあきらかにするであらう。

しかしながら、「すでに右の二労作の以前にも、すなわちミルからの抜粹にたいする評註——これは疑いもなくリカードからの抜粹にたいする評註よりもあとに書かれたものであるが——のなかでも、リカードの見解にたいするマルクスの批判の性格は變つてきており、労働価値説の根本的建てなおしの道がしめされている。ミルにたいする評註のなかでは、もはやこの理論の基礎は無条件に否定されていない。マルクスはいかかわらずそれを抽象とみなしているが、しかし、もはやそれを全体的に排斥してはおらず、むしろその理

論が方法的に正しく適用され正しくとりあつかわれ、ことを要求している。」(前掲書、八九ページ)すなわち、マルクスは価値を生産費によつて規定するミルを引用して、つぎのように評している。「ミルも——リカード学派一般とおなじように——抽象的法則を、この法則の変化あるいは不断の揚棄——それをつうじてこの法則ははじめて実現されるのだが——に触れずはいいあらず、という誤りをおかしている。もし、たとえば生産費は、結局は——あるいはむしろ、需要と供給との週期的な、偶然的な一致が実現されるばあいには——価格(価値)を決定するというのが不易の法則であるとすれば、それと同様に、この関係は一致することなく、したがつて価値と生産費は必然的な関係にないということも、やはり不易の法則である。そうだ。需要と供給はつねに、需要と供給のそれ以前の変動をつうじて、生産費と交換価値との不釣合をつうじて、瞬間的に一致するにすぎない。そしてこの変動と

この不釣合が、また同様に、瞬間的な一致のあとにつづくのである。この現実的な運動——右の法則はこの運動の抽象的な、偶然的な、一面的な契機にすぎないのだが——は、近代の国民経済学者によって偶然的なものに、非本質的なものにされている。」（MEGA, I/3, S. 530—31）

これについて、ローゼンベルグはつぎのように解説している。「リカードとリカード派にたいする非難はすでに、彼らが抽象を現実と言明し、現実を偶然と言明した点でなされてはいない。非難は別様に定式化されている。すなわち、彼らは抽象的法則をもちだしながら、『この法則の変化あるいは不断の揚棄——それをつうじてこの法則は実現されるのだが——』に触れていない、というのである。これは、マルクスが労働価値の立場にうつりはじめたことを意味する。マルクスは価格と価値との不一致が常則であり、法則であり、両者の一致は、全般的な運動における契機をなす

偶然であるという命題を、とくに強調していた。この全般的な運動がこの契機をも包含しているかぎりでは、この契機も法則であるが、しかし不断の揚棄をつうじて実現されるような法則なのである。」（前掲書、九〇ページ）いまやマルクスは、労働価値説に接近してきたのである。

かくして、価値の問題にかんするマルクスの見解の進化は、これをつぎのように定式化することができる。「(一)はじめ彼は、エンゲルスとおなじように、私的所有とそれによって条件づけられる競争とが支配するものでは、労働による価値規定は、私的所有と競争——そのもとでは、労働価値の否定である市場価格だけしか存在しない——を捨象することを意味する、と考えている。(二)その後、弁証法的唯物論の諸原則をしあげ、これを、経済現象をもふくめた社会現象におしよぼすことによつて、マルクスはつぎの結論に到達している。すなわち、市場価格は労働価値に対立するものであ

り、その意味でそれを否定するものであるとはいへ、しかもなお、市場価格は労働価値を無効にするものではなく、それといつしよになつて、運動を——眞の運動、

対立物の闘争によつてつくりだされる運動——を構成するものである、と。価値にたいするこの新しい見解は、この問題についてエンゲルスが『大綱』でかたり、マルクスもはじめのうち持していたものとくらべて、いちじるしい前進を表示している。」(ローゼンベルグ、前掲書、九〇ページ) だがこれはまださきのことであつ

て、「この評註のなかでは、労働価値は抽象的なもので、市場価格は現実的なものであることが、なおまだ力をこめて強調されており、労働価値にたいするマルクスのあたらしい見解はまだ生成の過程にあり、まだ最初の見解といりまじつている。」(同書、九一ページ)

要するに、価値法則の展開としてつかまれていない、とはいへ、これだけの進歩が、きわめて短期間に、経済学の系統的研究を開始した一八四四年の数カ月間

に、なしとげられたということは、マルクスの異常な研鑽を物語るものであろう。

つぎに、「リカードの労働価値説を、現実をゆがめる抽象として排斥したマルクスは、当然、リカードの利潤論と地代論をも、彼の労働価値説を基盤としてうちたてられたものとして、排斥することとなつた。すでにみたように、マルクスは、利潤も地代も私的所有への貢物にほかならず、この貢物の大きさは競争によつてきまるとする点で、プルドンに同意している。

マルクスは、リカードが彼の価値論でも、利潤論と地代論でも、競争を忘れているといつて非難している。」(ローゼンベルグ、前掲書、九一ページ) だが、利潤論・地代論についても、価値論におけるとおなじ移行がおこなわれた。そしてそれは、まさに剰余価値説の形成を意味したのである。

「マルクスが剰余価値説の基礎をきずいたのは、彼が労働価値説の否定からその肯定に到達するにいたつ

たときのことであり、彼がリカードの利潤および地代論にたいしてもちがった見方をするようになり、その理論をリカードのもつとも重要な科学的功績の一つとみるにいたったときのことである。この理論は、労働と資本との、また資本と土地所有との矛盾をあきらかにするための基礎をつくりだしたものである。」(前掲書、九一―二ページ)

「すでに指摘したように、マルクスは、利潤と地代を私的所有への貢物と解釈する点でブルードンと同意見であった。だがブルードンは、小ブルジョアとして、この命題から、この貢物は私的所有を廃止しないでも廃止できるという結論をひきだした。プロレタリアートの見地にたったマルクスは、この貢物は私的所有の廃止とともに始めて廃止されうると考えた。だがその後、彼は、私的所有自体がまたそれにおうじて貢物の形態が、どのように変化してきたかを研究し(資本主義以前の構成体でも貢物をうけとった私的所

有が存在していたのだ)、そして、ブルジョア社会では私的所有は剰余価値の形態をとり、労働者の剰余労働によってつくりだされるということを論証するにいたるのである。マルクスの経済学説全体のこの礎石はのちにきずかれたのであるが、きたるべき巨大な仕事がおこなわれうようになった方法と方向とは、マルクスのごく初期の経済学上の学説のうちすでにみとめられるのである。」(同書、九二ページ)

エンゲルスも、マルクスも、経済学にかんするその最初の労作——『国民経済学批判大綱』と『経済学者からの抜粋にたいする批判的評註』(とくに『リカードからの抜粋にたいする評註』、『ジェームス・ミルからの抜粋にたいする評註』)はすでにみたように、労働価値説への過渡をなす。——においては、労働価値説を否定していたこと。それは、当時彼らが、私的所有とそれによって条件づけられる競争との支配のもとでは、労働によって規定される価値は非実在的であって、

実在的なのは競争によって決定される市場価格だけであると考えていたからであること。彼らが労働価値説へ移行したのは、史的唯物論の形成にもなつて、価値法則というものを正しく把握し、現象形態と本質との関連を洞察しはじめてからのことであること。以上のようなローゼンベルグの主張は、いままでのマルクス・エンゲルスからの引用によって、動かしがたく論証されているようにおもわれる。(もつとも右のうち最後の点はなおこれ以後の展開にまたねばならないが。)しかしながら、マルクス・エンゲルスが最初から労働価値論者でなかつたという事実があきらかにされたことは、のちにのべるように、マルクス主義経済学が唯一の真に科学的な経済学であるということをしきりも傷けるものではなく、むしろその完成された姿におけるマルクス主義経済学の——科学性をよりいっそうあきらかならしめるものである、と考えられる。

四

マルクスは、経済学者からの抜粋ノートにつづいて、ほぼおなじころ、すなわち一八四四年の四、五月ごろから(この年のうちに)一連の経済学および哲学にかんする手稿を書いた。この手稿も、「Ökonomische-Philosophische Manuskripte」と題して「Marx-Engels Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 3, 1932」に発表された。

『経済学・哲学手稿』は三つのノートからなり、第一ノートは、「労賃」、「資本利潤」、「地代」、および「疎外された労働」(以下の標題はM・E・L研究所がつけたものをふくみ、第二ノートは「私有財産の關係」を、第三ノートは「私有財産と労働」、「私有財産と共産主義」、「欲望、生産および分業」、「貨幣」、および「ハゲルの弁証法ならびに哲学一般の批判」をふくんでいる。しかしそのうち、とくに、マルクスの独自の経済思想が展開されているのは、「疎外された労働」お

よびそれにつづく二、三の節である。

「疎外された労働」というこの節を、マルクスはつぎのように書きはじめている。「国民経済学は私的所
有の事実から出発する。しかし、それはこの事実をわ
れわれに説明してはくれない。それは、私的所有が現
実にへてゆく物質的、な過程を一般的・抽象的な定式で
とらえ、つぎにこれをみずからの法則として通用させ
る。それはこの法則を概念的に把握しない。すなわち
それは、この諸法則がいかにして私的所有の本質から
生じるのかを指示しない。」(MEGA, I/3, S. 82; 邦訳、
『選集』補巻4、二九六ページ)そこで、マルクスがこの
私的所有の法則を説明することになる。

「われわれは国民経済学的な眼前の事実から出発す
る。

労働者は、彼が富をより多く生産すればするほど、
彼の生産の力と量が増大すればするほど、それだけま
すますますしくなる。労働者がより多くの商品をつく

ればつくるほど、彼はますます安価な商品となる。物
的世界の価値増大に正比例して、人間世界の価値低落
が進行する。労働はたんに商品を生産するばかりでは
ない。それはそれ自身および労働者を商品として生産
する。……

この事実はさらに、労働が生産するもの、労働の生
産物が疎遠な存在として、生産から独立した力として
労働に対抗することを表現するものにはかならない。
……労働の実現は労働の対象化である。国民経済学的
な状態では、この労働の実現が労働者の非現実化に、
対象化が対象の喪失および隷属に、獲得が疎外、外在
化にみえるのである。」(a a O. S. 83; 邦訳、二九八―九ペ
ージ)

「労働者の彼の対象における疎外は、国民経済学
の諸法則にしたがえば、つぎのように表現される。労働
者がより多く生産すればするほど、彼はそれだけま
すす少く消費せざるをえない。彼がより多くの価値を

創造すればするほど、彼はそれだけ、ますます無価値に、ますます下等となる。彼の生産物がかつこうよくなればなるほど、労働者はますますぶかっこうになる。彼の対象が文明的になればなるほど、労働者はますます野蛮になる。……」(a. a. O., S. 84 訳、三〇一ページ)

これは「労働者の」「労働生産物にたいする関係」における「疎外」である。しかし、「疎外はたんに」労働の「結果においてだけではなく、また生産の行為においても、生産活動そのものの内部にもあらわれろ。」(a. a. O., S. 85. 訳、三〇二―三ページ)この「労働の外在化」はつぎの点にあらわれている。

「第一に、労働は労働者にたいして外的である。すなわち、それは彼の本質にぞくしていない。……だから労働者は、労働の外物ではじめて自己のもとにあると感じ、労働のなかでは自己のそとにあると感じる。……彼の労働は、自発的ではなくてしいられたものであり、強制労働である。それだから労働は、欲求の充

足ではなくて、労働以外の欲求を充足するためのただの手段にすぎない。……最後に、労働者にとつての労働の外在性は、労働が彼自身のものではなくて他人のものであり、労働が彼にぞくせず、労働において彼は自分自身ではなく他人にぞくする、というところにあらわれている。

したがって人間(労働者)は、ただわずかに彼の動物的な諸機能、つまり、くうこと、のむこと、うむこと、そのほかにはせいぜい住居や衣服等において自然的だと感じるにすぎず、彼の人間的な機能(すなわち労働―筆者)においては動物とほとんどかわらない、という結果になるであろう。」(a. a. O., S. 86. 訳、三〇三―四ページ)

それでは、この疎外された労働の結果はなんであるか。「もしも労働の生産物がわたしにたいしてよそよそしく、疎遠な力としてわたしに対立するならば、そのときにはこの生産物は誰にぞくするのであるか?」

「神」にか？ 否。「労働と労働の生産物がそれにぞくする、労働がそれへの奉仕である、……そうした疎遠な存在とは、ただ人間自身でしかありえない。」「もしも人間が彼の労働の生産物、対象化された彼の労働にたいして、疎遠な、敵対的な、強力な、彼から独立した対象として関係するとすれば、彼はこの生産物にたいして、なんらか他の、彼にとって疎遠な、敵対的な、強力な、彼から独立した人間が、この対象の支配者である、というように関係するわけである。もしも彼が彼自身の行為にたいして不自由なものとして関係するとすれば、彼はこの行為にたいして、なんらか他の人間に奉仕した、その支配とその強制とその桎梏のもので行為として関係するわけである。」(a. a. O., S. 89. 訳、三二〇—二一ページ)

「こうして疎外された、外在化された労働によつて、労働者は、労働に縁のない、労働の外部にたつ人間の、この労働にたいする関係をうみだす。労働にたいする

労働者の関係は、労働にたいする資本家の……関係をうみだす。それだから私的所有は、疎外された労働の……産物であり……、その必然的帰結なのである。

したがって私的所有は、外在化された労働、すなわち外在化された人間、疎外された労働、疎外された生活……という概念の分析をつうじて、あきらかとなるのである。

たしかにわれわれは、外在化された労働……という概念を、国民経済学から、私的所有の運動の結果としてうけとつた。しかしこの概念を分析してみると、私的所有は、外在化された労働の根拠、原因としてあらわれはするが、むしろそれはこの外在化された労働の一つの帰結にはかならないことがあきらかになる。……あとになつて、この関係は交互作用に転化するのである。」(a. a. O., S. 91. 訳、三二二—二三ページ)

すでにみたように、エンゲルスは『国民経済学批判大綱』において、私的所有こそこんにちの社会全体が

立脚している基礎であり、経済学のすべての範疇が派生する根元であるという、注目すべき貴重な思想を展開し、マルクスは『経済学者からの抜粋にたいする評註』でこの思想を、自己の理論的分析の起点としていた。しかるにいま、『経済学・哲学手稿』において、マルクスによつて「疎外された労働」というあらたな概念が提出され、それが私的所有の根源であり、私的所有は疎外された労働の帰結にすぎないことがあきらかにされた。

もつとも、疎外された労働一般は、私的所有一般と同様に、すべての階級社会の経済構造にみられるところのものである。しかし、マルクスイエンゲルスが念頭においていた私的所有が、つねに、資本家的私有であったように、ここで問題にされている疎外された労働は賃労働にほかならない。そして労働者に疎遠な、敵対的な、強力な、疎外された労働生産物とは、資本にほかならない。ブルジョアの私有は資本の所有であ

る。だから、疎外された労働（賃労働）は私的所有（資本）の根源である。

もちろん、『経済学・哲学手稿』においては、賃労働の特質はまだ把握されていず、また資本にかんする学説もまだできあがっておらず、したがって資本制生産、ひいては資本家的私有の特徴も十分に理解されてはいない。しかし、たとえ「抽象的、一般社会学的」（ローゼンベルグ、前掲書、一四六ページ）にせよ、賃労働（疎外された労働）と資本（私的所有）の相互関係が把握されたことは、従来の全経済学にはまったく未知であつて、しかもそれを完全に变革するような原理の端緒が確立されたものと、いいうるのであろう。この意味において、疎外された労働の思想は、まさに剰余価値理論の萌芽だったのである。

つぎのローゼンベルグのことは、右のような意味において、理解さるべきであろう。一疎外された労働と私的所有の交互作用にかんするマルクスの学説は、

経済学のすべての問題をあたらしく提起し、この科学の根本的な改造の道をひらいた。すでにエンゲルスは、経済学のすべてのカテゴリーは、その基本的カテゴリー——ブルジョア経済制度全体が立脚している

五

私的所有——から生じるといふ、注目すべき実りゆたかな思想を展開していた。マルクスは、この思想をそつくりとりいれて、力をこめて首尾一貫してそれを発展させた。その成果が、疎外された労働にかんする彼の学説だったのである。この学説に照らされて、ブルジョア経済全体の土台としての、またその経済学を研究する者にとつての出発点としての私的所有が、まったくあたらしい光を浴びることとなった。この土台は、またそれに対応して右の出発点は、私的所有一般ではなくて、賃労働を生みだしつつそれ自身賃労働によつて生みだされる私的所有、すなわち資本主義的私的所有なのである。要するに、真に科学的な経済学は、研究の出発点として私的所有と疎外された労働すなわち

賃労働がとりあげられるときに、建設されうるのである。」(前掲書、一六一ページ)

エンゲルスは、一八四四年八月ドイツへの帰途パリにマルクスをおとずれ、二人は完全な意見の一致をみて、ここに生涯かわることのない親交と協力がはじまつたのである。マルクスとエンゲルスの最初の共同労作『聖家族』(Die heilige Familie, oder Kritik der kritischen Kritik)は、青年ヘーゲル派のブルノー・パウアー一派にたいする論戦として、一八四四年秋パリにおいて(主としてマルクスによって)書かれ、一八四五年二月に出版された。

『聖家族』において、マルクスとエンゲルスは、パウアーが「批判的批判」という名目のもとに極端化した観念論、現実の人間を自己意識におきかえる思弁的観念論を徹底的に批判し、弁証法的唯物論を展開してい

る。そしてこの立場から、歴史をつくるものは批判的な個人でありプロレタリアートは無批判的な大衆である」とみなしたバウアー一派の有害な見解に断固として反対し、「プロレタリアートの世界的役割」を闡明している。プロレタリアートにおいては、「あらゆる人間性からの抽象」が、もつとも尖锐な非人間的な生活条件があたえられており、彼らは絶対的な必要によって「この非人間性への反逆を強制されているがゆえに、プロレタリアートは自分自身を解放しうるし、また解放せずにはいないのである。」(MEGA, I/3, S. 207. 訳、『選集』補巻4、二四三―四ページ)

『聖家族』では、史的唯物論の学説はまだ展開されていないが、この学説の核心はすでにあたえられている。「それとも批判的批判は、自分が、自然にたいする人間の理論的および実践的なたらしかけを、つまり自然科学と産業とを、歴史的運動から除外しておきながら、歴史的現実の認識が、はたして端初にでもつ

いたと信じているのだろうか? それとも批判的批判は、たとえば、ある時代の産業、すなわち生活そのものの直接的生産様式を認識もしないで、実際にその時代をすでに認識したつもりでいるのだろうか? たしかに、唯心論的、神学的な批判的批判は、……歴史を自然科学と産業とからきりはなしているのであるが、このようにして批判は、歴史の出生地を、地上の粗野な物質的、生産のうちにはなく、天上のもやもやした雲の層のうちに見ているのである。」(a. a. O., S. 327. 訳、三七四―五ページ)

また、マルクスは『聖家族』のなかで、生産関係という概念に接近している。レーニンは『哲学ノート』のなかで、つぎの一句を引用して、つぎのように指摘している。「ブルードン(の)『平等な占有』という観念は、人間にたいする存在としての、すなわち人間の、対象的存在としての対象は、同時に他の人間にたいする人間の定在であり、他の人間にたいする人間の人間

的関係であり、人間の人間にたいする社会的態度であるといふことの、国民経済学的な、したがってなおまだ疎外された表現なのである。」(a. a. O., S. 213. 訳、二五二ページ)「この個所は非常に特徴的である。というのは、マルクスが彼の『全体系』……の根本思想に、すなわち社会的生産関係という思想に、接近していることをしめしているからである。」(レーニン『哲学ノート』邦訳一九四七年版、一六ページ)と。(ローゼンベルグ前掲書、三九三ページ参照。——これ以下の部分はブリュエミン執筆の補遺である。)

さらに『聖家族』は、経済理論のうえでも注目すべき章句をふくんでいる。おなじくレーニンは、『哲学ノート』のなかで、マルクスがこの著作で「労働価値説に近づいている。」(同右、一七七ページ)ことを指摘している。彼はつぎの一句を念頭においているのである。「あるものの生産につい、や、される労働時間はそのものの生産費のうちにはいるということ、あるもの

生産費はそれについ、や、される額——したがって、競争の影響を度外視すれば、それが売られうる額であるといふこと、これらのことの洞察なら、批判的批判にできないはずはなご。」(a. a. O., S. 219. 訳、二五四ページ)ブリュエミンが指摘しているように、「重要なのは、マルクスが右の引用文で、商品を生産するのについ、や、される労働時間の意義をとくに強調していることである。」(前掲書、三九四ページ)

しかし、『聖家族』を準備していた時期には、マルクスは、価値論の問題で彼がもっていたまちがった命題から、まだ完全には脱却していなかった。たとえば、マルクスはこの著作で、価値にたいするブルードンの解釈を擁護している。生産費にかんするさき引用した敘述をつづけて、マルクスはつぎのように書いている。(同右ページ)「国民経済学者たちは、労働時間や労働の原料のほかに、さらに土地所有者の地代ならびに資本家の利子と利潤を、生産費のうちにいれて

いる。このうち利子と利潤とは、ブルードンではぬけている。なぜなら、彼のばあいには私的所有がぬけているからである。だから、のこるものは労働時間と出費だけである。ブルードンは、人間的活動の活動としての直接的定在である労働時間を、労賃と生産物の価値決定との尺度とすることによって、ふるい国民経済学では資本と土地所有という物的な力が決定的であったのにたいして、人間的な側面を決定的なものにしてゐる。』(a. a. O., S. 219. 訳、二五四ページ)

だが、ブリューミンが説いているように、そこにはあきらかな前進がみとめられる。「右の引用文からわかるように、マルクスはまだこの時期には、価値形成における労働の規定的役割は、私的所有が廃止されたあとで、すなわち社会主義社会で、とくに増大すると考えていた。しかし以前にのべられた命題(リカードからの抜粋にたいする評註で)とは異なり、マルクスは、資本主義的生産のもともどもつ、価値規定のさいの

労働時間の重要な意義を強調した。これは、労働価値論を完全に承認する方向への一歩前進であった。」(前掲書、三九四ページ)

さて、マルクスが『聖家族』の出版を準備していたころ、エンゲルスは郷里バルメンにかえつて、イギリス滞在中にえた資料によって『イギリスにおける労働者階級の状態』(Die Lage der arbeitenden Klasse in England)を書きあげ、一八四五年六月にこれを出版した。

『聖家族』では、私的所有とプロレタリアートとが对立物の統一として考察されていた。エンゲルスのこの著書全体を一本の赤い糸として貫いているのも、このおなじ思想であつて、彼は産業革命によつてもたらされた資本制的関係のもとにおける労働者階級の悲惨な状態を尨大な事実資料にもとづいて全面的に敘述しつつ、プロレタリアートをたんに社会のもつとも苦難する階級としてだけではなく、ブルジョアジーによつて

運命づけられた状態と和解せず、資本のくびきから自己を解放するため、その唯一の活路である社会主義のためにたたかうところの、社会のもつとも革命的な階級として、描きだしている。

しかし、この著作では、経済的範疇はすべて、「現代ブルジョア社会を支配している万人の万人にたいする戦争」（『選集』補巻2、一一九ページ）としての競争の作用に帰せられており、たとえば、プロレタリアは「ある『等価物』、すなわち彼の労働とひきかえに」（同右、一二〇ページ）のみ、ブルジョアから生活資料を手に入れるのであり、この「等価物」の大きさをきめるものは労働者のあいだの競争であって、この競争によってその等価物は、生きてゆくのに必要な最低限の生活資料に帰着する。プロレタリアは、事実上ブルジョアの奴隷であって、ただ「一度きりに売られるのでなくて、一日ごと、一週ごと……に売られるという点で、また……労働者自身がこうしたやり方で自分を売

らなければならぬ」という点で」（同書、一二五ページ）古代の奴隷と相違するにすぎない、とされている。このような見解は、ここではまだ、資本制生産関係の経済学的分析、要するに剰余価値学説が欠けているためである。

六

プロシヤ政府の圧迫によって、一八四五年二月ブリュッセルにうつったマルクスは、エンゲルスとともに経済学の研究をつづけ、『政治および経済学の批判』と題する著述の出版契約をむすびさえたが、これにさきだつてエンゲルスとともに、ドイツ哲学にたいする対立的見解を共同でまとめあげたことを、彼らのかつての哲学的意識の清算することを決心した。この仕事は、ヘーゲル以後の哲学、すなわちフォイエルバッハ、B・バウアー、シュテイルナー、および「真正社会主義」の代表者カール・グリューンの批判という

かたちで、一八四五年九月から四六年七月にかけて遂行され、『ドイツ・イデオロギー』(Die Deutsche Ideologie)と題されたが、その出版を拒否され、生前発表の機会がなく、ようやくGesamttausgabe, I, Abt. Bd. 5, 1933に完全なかたちで発表された。

本書のもっとも重要な部分は、第一部「フオイエルバッハ」であつて、それは未完成ではあるが、主として唯物史観の敘述からなつてゐる。すなわち、本書はマルクス・エンゲルスの新世界観、なかならず史的唯物論の成立をしめすものとして、決定的な意義をもつてゐる。以下その要点を若干抜粋しよう。

「われわれはあらゆる人間的存在の、したがつてまたあらゆる歴史の第一の前提を確認することからはじめなければならない。すなわち人間は、『歴史をつくりうるためには、生きてゆくことができなければならない』という前提である。ところで生きるのに必要なものは、なによりもまず食ふことと飲むこと、住むこと、

着ること、そのほかなおいくつかのことである。したがつて第一の歴史的行為は、これらの欲望をみたすための手段の産出、すなわち物質的生活そのものの生産である。」(MEGA, I/5, S. 17. 古在由重訳、岩波文庫、三四ページ)ところで生活の生産にはもう一つの側面があつて、「自分自身の生活を日々あらたにつくる人間が、他の人間をつくりはじめ。すなわち繁殖しはじめる」のであつて、これは「夫と妻との、親と子との関係、すなわち家族である。」(a. a. O., S. 18. 訳、三六ページ)ところで「生活の生産は、労働における自己の生活の生産も生殖における他人の生活の生産も、そのまますぐに二重の関係として——一方では自然的な、他方では社会的な関係として——あらわれる。」ここに社会的というのは、「いくたりかの個人の協働」という意味であり、したがつて「一定の生産様式……はいつちも一定の協働様式……とむすびついており、この協働様式がそれ自身一つの『生産力』である。」そして「人

間の達しうる生産諸力の量は社会的状態を制約し、したがって『人類の歴史』はいつも産業および交換の歴史とのつながりにおいて研究され論究されねばならぬ。」(a. a. O., S. 19, 訳、三六―七ページ)ということがあきらかになる。

「いままでのすべての歴史的段階に存在する生産諸力によって制約されていながら、またこれらを制約もしている交通形態（これはのちの生産関係の概念に相当する——筆者）は、市民社会である。」「市民社会は生産力の一定の発展段階の内部における諸個人の物質的交通全体をつつんでいる。」「この市民社会がすべての歴史の真のかまどであり舞台であって」、この「直接に生産と交通から発展する社会組織は、すべての時代に国家およびその他の観念的な上部構造の土台をかたどつてゐる。」(a. a. O., S. 26, 訳、四九ページ)「彼らの物質的生活と彼らの物質的交通とを發展させつつある人間が彼らのこの現実とともに彼らの思考および

思考の生産物をもかえてゆく。意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する。」(a. a. O., S. 16, 訳、三二―三ページ)

「したがつてこの歴史観はつぎの点にもとづいていゝ。すなわち現実的な生産過程を、しかも直接的な生活の物質的生産から出発して展開すること。そしてこの生産様式とつながつていて、これによつてうみだされるところの交通形態を、したがつて種々の段階における市民社会を全歴史の基礎としてつかむこと。さらにこの市民社会を国家としてのその活動において敘述するとともに、意識の種々な理論的所産および形態すなわち宗教、哲学、道徳などをすべて市民社会から説明し、そしてそれらのものの発生過程を市民社会の種々の段階からあとづけること。このようにすれば当然また、事態はその全体性において（したがつてまたこれら種々の面の交互作用も）敘述されうることになる。」(a. a. O., S. 27, 訳、五一―二ページ)

すでにみたように、『聖家族』において生産関係の概念に接近していたマルクスは、『ドイツ・イデオロギー』では、「交通形態」という用語で、明確に生産関係を把握した。しかもこの生産関係は、生産力に照応し、またこれを制約するものとして、弁証法的につ

かまれている。そして、「桎梏となった前代の交通形態のかわりに、いつそう発展した生産力に、——したがってまた個人の自己活動のいつそう進歩した方式に照応する、一つのあたらしい交通形態があらわれ、こんどはこれがまた桎梏となって、さらに他の交通形態にとつてかわられる。」(a. a. O., S. 62. 訳、一一〇ページ)という関係が、また「歴史上のあらゆる衝突は、生産力と交通形態とのあいだの矛盾のうちその根源をもつている。」(a. a. O., S. 63. 訳、一一二ページ)という事実が、明白に指摘されている。さらにこの生産諸関係の総体としての市民社会、すなわち社会の経済的構造が、国家および意識、思想、理論などのいっさいの上

部構造を制約する土台であることが、はつきりと言明されている。したがって、のちに『経済学批判』(一八五九年)の序言において完成されたところの、史的唯物論の定式がすでにここにあたえられているわけである。

それでは、この史的唯物論の成立は、科学的な経済学の発展、とくに労働価値説の形成にとつて、どのような意義をもっているであろうか。人間の歴史の、いかえれば人間社会の存立の、第一前提は、衣・食・住などの人間の必須の欲望をみたすための、もろもろの生活手段の産出、すなわち物質的生活の生産であり、この物質的生産において、人間は共同して自然に働きかけ、自然からこれらの生活手段を獲得する、この生産における人々の関係(生産関係)こそ社会の土台である、と考えるところの史的唯物論は、人間労働を経済生活を規制する根本原理とみなすところの労働価値説の、必須的な基本的前提でなければならぬ。」ま

ことにこの活動、このたえざる感性的な労働と創造、この生産こそ、いま存在するような感性的世界全体の基礎なのだから、もしもそれがただの一年間でも中絶されるとすれば、……たんに自然界のなかに途方もない変化をみいだすばかりでなく、全人間界と彼自身の直観能力を、いな自分自身の存在をさえ、たちまちのうちにもうしなうてしまふだろう。」 a. a. O. S. 32.

訳、六二ページ) という認識こそ、「労働を原理とする経済学」をなりたさせる根元であり、またこの事実こそこのような経済学を経済生活の唯一の本質的洞察たらしめる現実の地盤ではないだろうか。

それだけではない。人間の労働は人間が生きてゆくために必要なものよりもより多くのものをつくりだすのであって、このような人間労働の創造性こそが、人間社会の発展の、いつさいの文明の基礎なのである。

このような認識は、当時のマルクス・エンゲルスの文献中に明文をもつてしめされていないとはいえず、この

ような労働の創造性こそが、「労働の疎外」をもひきおこす物質的土台なのであり、その事実はやがて剰余価値学説において、明白に把握されるにいたるのである。

七

マルクスがブリュッセルで書いた著作にはなお、一八四七年七月に刊行された『哲学の貧困』(Miserè de la philosophie, Réponse à la Philosophie de la misère de M. Proudhon)がある。これはブルードンの『経済的矛盾の体系、あるいは貧困の哲学』(Système des contradictions, ou la Philosophie de la misère, 1846)にたいする批判として公けにされたものであるが、ここでマルクスは、自己の経済学説をはじめて体系的に展開し、また史的唯物論をいっそう完全に発展させている。

まずマルクスは、価値論について、ブルードンがいかにリカードをゆがめることによって、誤った結論に到達しているかをしめした。ブルードンは生産費が、

すなわち生産物を生産するためにやされた労働時間、
間が、「使用価値と交換価値との総合」としてこの、「構成された価値」を規定すると考え、この構成された価値を自己の科学的発見とみなした。マルクスはこれを批判している。「リカードは価値を構成するブルジョアの生産の現実的運動を、われわれにしめしてくる。……〔ところが〕ブルードン君は、構成された価値によって一つの新しい社会的世界を構成するために、構成された価値を出発点とするのだ。……労働時間による価値決定は、リカードにとっては交換価値の法則であり、ブルードン君にとっては使用価値と交換価値との総合なのである。リカードの価値論は現実の経済生活の科学的解説であり、ブルードン君の価値論は、リカードの理論のニュートピア的やきなおしである。」(Marx, *Das Elend der Philosophie*, Bücherei des Marxismus-Leninismus, Dietz Verlag, S. 68-69. 訳『選集』第一巻、二九三—四ページ)「生産物の構成された価値」

労働価値説と史的唯物論の成立(松田)

値なるものは、たんにその生産物に凝結している労働時間によって構成される価値であるにすぎないのである。」(a. a. O., S. 65. 訳、二八六ページ)

ローゼンベルグはこれを、つぎのよう解説している。「マルクスはブルードンがなんの発見もしておらず、ただリカードの価値論を観念論的に空想主義的に解釈しているにすぎないことをしめしている。……ブルードンは交換価値の起源を説明しようところまで、交換価値と使用価値との対立に注意を集中している。彼の考えによれば、特別のカテゴリとしての価値のうちには両者の和がみいだされる。商品を生産するのに支出された労働によって決定される価値は、使用価値と交換価値との総合である。この価値を、ブルートンは『構成された価値』と名づけている。というのは、それは種々の生産部門間に均衡をたもって配分される労働によって確立されるから、というのである。ここから、ブルードンが『発見』した新しいカテ

ゴリーの第三の名称——『比例的価値』——がでてくる。「マルクスはブルードンを一步一步あとづけながら、交換価値の起源はブルードンによって説明されていないこと、交換価値と使用価値との対立を彼は極端に馬鹿げたところまでもつていったこと、彼が『発見』した『構成された』価値は、本質的には新しいカテゴリーではなくて、あのおなじ交換価値であることを、しめしている。」(前掲書、二九四ページ)

ブルードンは「比例的価値」ということは使っていないが、「価値とは、富を組成する諸生産物の比例性関係である。」(a. a. O., S. 79. 訳、三〇五ページ)といっている。マルクスはこれを批評している。「誰もがつ知っているように、供給と需要とが均衡をたもっているばあいには、任意の一生産物の相対的価値は、その生産のなかに凝結されている労働の分量によって決定されるのだ。すなわち、この相対的価値は、まさにわれわれがたつたいそれぞれに付したような意味での比例

性関係を表示するのである。ブルードン君は物事の順序をあべこべにしてしまふ。まず最初に——と彼はいう——生産物の相対的価値をその生産物のなかに凝結されている労働の分量によってはかりたまえ、そうすれば、供給と需要とはかならず均衡をたもつてである。生産は消費に照応するであろう。生産物はいつでも交換されるであろう。生産物の時価は生産物の正しい価値を正確に表示するであろう。」(a. a. O., S. 79-80. 訳、三〇六—七ページ)こういうことがいえるためには、「彼は、一つの商品をつくりだすのに必要な時間が、その効用の度合を正確にしめし、かつまた需要にたいする、したがって富の総体にたいするその商品の比例性関係をあらわすことを証明しなければならぬであろう。」(a. a. O., S. 80. 訳、三〇七ページ)「事実ブルードン君は、一つの生産物をつくりだすために必要な労働時間が、欲望にたいするその生産物の正しい比例をしめすこと、したがってその生産についてやされる労働

時間のもつとも少い物がもつとも直接的に効用あるものであり、以下順次これに準ずる、ということ¹⁾を証明しようとする命題になっているのだ。」(a. a. O., S. 80-81. 訳三〇八ページ) いいかえれば、生活必需品ほどその価値が低くなければならないということであるが、生産が「諸階級の敵対関係のうち」(a. a. O., S. 81. 訳、同右ページ)のみ発展してきた現実においては、²⁾けつしてそうはならない。ただし、「諸階級の敵対関係が消滅し、もはや階級というものが存在しないようになさるべき社会にあつては、……種々さまざまな物品にさざげられる社会的生産の時間が、そのものの社会的効用の度合によつて決定されるであろう。」(a. a. O., S. 83. 訳、三一ページ)が、したがつて、「なにかある生産物をその生産費にひとしい価格で売ることが、需要供給の『比例性関係』または生産全体にたいする生産物の比例的割前を規整するものではけつしてない。生産者に、せめて生産費だけでもひきかえにうけとるために

は所与の商品をどれだけ生産しなければならないかという分量を指示してやるのは、需要と供給との諸變動なのである。さらに、種々の産業諸部門について、資本の間断なき引上・投下運動が存在するの³⁾もまた、これらの變動が間断なくおこるからなのである。」(a. a. O., S. 83. 訳、三一ページ)

要するにここで、マルクスはブルードンにたいして、商品生産社会では、社会的欲望におうじて社会的総労働を種々の生産部門に配分するためのア・プリオリな基準はなにも存在しないこと、したがつて商品の価値すなわちその生産に必要な労働時間はそのものの効用に比例しないこと、この労働の配分を規整する力はただ需要供給関係だけであること、を教えているのである。これはきわめて重要な指摘であるとおもわれる。

さてつぎに、ブルードンは構成された価値から、「一定量の労働は、この同一量の労働によつてつくりださ

れる生産物と等価である。」(a. a. O., S. 69. 訳、二九四ページ) という結論をひきだしている。この、そのなかに凝結している労働の分量によってはかられる商品の価値と「労働の価値」、結局は賃金との混同こそ、「ブルードン君がリカードの学説からひきだしてくる『平等主義的』諸結論」(a. a. O., S. 74. 訳、三〇〇ページ)の源泉なのである。では、この「労働の価値」または賃金はなにによって決定されるか。「労働はそれ自体が商品であるから、そういうものとして商品たる労働を生産するために必要な労働時間によってはかられる。では、商品たる労働を生産するために必要であるか？ 労働の不断の維持のために、いいかえれば労働者をして生活させ、さらに彼の種族をふやしうるようにするために、欠くことのできない物を生産するだけの労働時間が、必要なのである。」(a. a. O., S. 70-71. 訳、二九六ページ)

ローゼンベルグはここからつぎのような結論をひき

だしている。『哲学の貧困』のなかにはまだ、しあげられた剰余価値理論はない。だがその理論の基礎は、『商品たる労働』という新しい理解のうちにぎざかれている。マルクスはまだ『労働の価値』といっている。だが彼はすでに、第一に、この特殊な商品の特別な性質——労働によって、それ自身の価値よりも大きな価値が生産されるという——を発見していた。第二に、マルクスは、資本家が、価値法則をやぶることなしに、この剰余を利潤というかたちで取得することをしめした。価値法則をやぶるどころか、まさに価値法則の作用にもとづいて、またこの作用に『商品たる労働』もしたがうようになるにつれて、利潤の獲得とブルジョアの富の蓄積との可能性が作りだされてくるのである。」(前掲書、二九八ページ)

さらに、労働が価値をもつことを否定し、労働の価値とは比喩的な表現であると主張したブルードンにたいして、マルクスはつぎのように書いた。「おそるべ

き現実である商品たる労働のなかに、彼は文法上の一略辞法しかみないのである。だから、商品たる労働を基礎とする現在の社会全体は、今後は詩的破格語法に、比喩的表現に、その基礎をおくことになるのである。」(a. a. O., S. 77. 訳、三〇三頁)

ローゼンバルグは、これについてつぎのように述べている。「マルクスはすでに『経済学・哲学手稿』のなかで、とくに、疎外された労働の学説で、この命題にちかづいている。マルクスは商品たる労働のうち、労働者の労働の疎外、労働者の非人格化、荒廃、非人間化をみた。だがそこでは、マルクスはこれを私的所有一般的作用とむすびつけており、したがって、彼はまだ、私的所有一般に立脚する前資本主義的構成体とブルジョア社会とのあいだに区別をつけていなかった。『哲学の貧困』では、マルクスは史的唯物論の理論にもとづいて、(商品たる労働という)この『おそるべき現実』と、社会の生産力およびそれに照応する生

産関係の発展における一定の段階との、すなわちブルジョアの経済構成との、関連をあきらかにしている。

私的所有一般による労働の疎外は、実際に、前資本主義的構成体でもおこった。だが、それが支配的な原則となつたのは資本主義のもとではじめてであつて、そのもとでそれは新しい表現形態を獲得したのである。」「イギリスの古典学派は、労働が商品であり価値をもつことを否定しなかつたとはいえ、しかし彼らも、ブルジョア経済学者として『商品たる労働』のうちになら『おそるべき現実』をみなかつた。それをみることで、そして実際にみたのは、革命的なプロレタリア思想家だけである。だがマルクスは、それをみ、そこからでてくる結論をくだしたことによって、経済学における完全な変革の端緒をひらいたのであつて、その経済学の礎石となつたのが剰余価値理論である。」(前掲書、二九八―九ページ)いうまでもなく、商品としての労働力の売買は剰余価値生産の前提であり、基礎であ

るから、「商品たる労働」を「現在の社会全体の基礎」とみとめることは、剰余価値学説の端緒なのである。

かくして『哲学の貧困』は、価値論については、商品にふくまれてゐる労働の二重性格の分析はまだないけれども、前述の労働配分の法則と価値法則との関連

のようなその根本問題に触れてゐるほか、なかんずく価値論を「ブルジョア社会の理論」(a. a. O., S. 68. 訳、二八八—九ページ)と考へたこと、いいかえれば、価値を商品生産に固有な歴史的範疇とみなした点(ローゼンベルグ、前掲書、二九六ページ参照)において、リカード、すなわち古典経済学のそれをこえて、科学的な労働価値説の基礎をきざしたのであり、剰余価値学説については、いまのべたように、その端緒をひらいたのであった。

八

マルクスは、一八四七年十二月ブリュッセル・ドイ

ツ人労働者協会で経済学にかんする連続講演をおこなひ、それがのちに『賃労働と資本』(Lohnarbeit und Kapital)と題して、一八四九年四月『新ライン新聞』(Neue Rheinische Zeitung)に発表された。

まずマルクスは、「賃金とはなにか?」(Marx-Engels Ausgewählte Schriften in zwei Bänden, Bd. I, S. 68. 邦訳、『二巻選集』第一巻、六〇ページ上)という問題に解答するために、「労働は……一個の商品である。」(a. a. O., S. 69. 訳、六〇ページ下。エンゲルスによる訂正をとりのぞき、マルクスの原文による。)という事実を基礎としている。すなわち、この講演でもまだ、労働者が資本家に売るのは、労働力ではなくて労働であるとされている。しかし彼は、労働が商品となっているというこの現実のうちに、『経済学・哲学手稿』であきらかにされたかの労働の疎外をみてとり、より高い理論水準でこれを敘述している。「労働は、労働者自身の生命活動であり、彼自身の生命の発現である。そしてこの生

命活動を、彼は、必要な生活資料を手に入れるために他人に売るのである。したがって、彼の生命活動は、彼にとってはただ生存するための手段にすぎない。彼は生きるために働く。彼は労働を彼の生活のなかにふくめることさえしない。労働はむしろ彼の生活の一つの犠牲なのである。それは彼が他人に売りわたした一つの商品である。したがって、彼の活動の生産物も、彼の活動の目的ではない。」(a. a. O., S. 70, 訳、六一ページ下) マルクスは、労働という商品を、資本による労働の隷属化の特殊の形態で、ブルジョア社会に特有のものともみているのである。

つぎにマルクスは、賃金——すなわち労働という商品の価格——の大きさがいかにして決定されるかをあきらかにするために、一般に商品の価格はいかにして決定されるかという問題に答えている。商品の価格は、供給と需要の変動によって騰落するけれども、この価格の騰落につれて産業領域間に資本の移出入がお

こり、かくして一定期間内には騰貴と下落とはたがい相殺され、商品の「価格はその生産費によって決定されるのである。」(a. a. O., S. 74, 訳、六五ページ上) ことに、「価格がある商品の生産費によって決定されるということは、価格がある商品の生産に必要な労働時間によって決定されるということにひとしい。」(a. a. O., S. 75, 訳、六五ページ下) のであるから、それはあさらかに労働価値説である。しかも「マルクスは、自然発生的に作用する価値法則を考察して、価値法則を、それがブルジョア社会で発現する、また発現しうる形態と不可分のものと考えている。市場価格の価値からの偏倚を、彼以前の人々は価値法則の侵害とみたのであるが、マルクスはこれを、価値法則の発現の不可避的な形態ともみている。」(ローゼンベルグ、前掲書、三一六—三七

ページ) マルクスはこういつている。「ほかならぬこの変動、すなわち、くわしく観察すれば、このうえなくおそろ

しい荒廃をとめない、地震のようにブルジョア社会の基礎をゆりうごかしている、ほかならぬこの変動だけが、その経過をつうじて、価格を生産費によって決定するのである。こういう無秩序の総運動が、この社会の秩序なのである。この産業的無政府状態の経過をつうじて、この循環運動のうちで、競争がいわば一方の行きすぎを他方の行きすぎによって相殺するのである。」(a. a. O., S. 75. 訳、六五頁下)

ローゼンベルグはこの章句の意義についていう。

「これは経済学における新しい言葉であった。なるほど、リカードのような労働価値論者には、市場価格は価値と一致せず、価値をめぐって変動することが知られていた。しかしリカードや他の経済学者は、右の価格変動を、価値法則と矛盾しない事実とみなながらも、市場価格の変動がブルジョア社会における価値法則そのものの本性から生じること、その変動は、私的所有の支配という条件のもとでこの法則がはじめて発現しう

る不可避的な形態であることを、しめさなかつた。」
「すでにみたとおり、マルクスははじめリカードの労働価値説をしりぞけた。なぜならマルクスは、不断にやぶられるようなものを経済法則とみとめることはできなかつたからである。そして彼は、リカードがこういう侵害を、基本的な価値法則が作用するもとの例外外則であるとみて、この侵害を弁護論的考慮から過小評価していると考へた。だが資本主義的生産様式の経済法則をさらに研究していくと、マルクスは、市場価格の変動こそ、価値法則がはじめて発現しうる形態であることがわかつたのである。」(前掲書、三一七―一八ページ)かくしてわれわれは、労働価値説の否定からその肯定への道を、マルクス＝エンゲルスとともに一応あゆみおえたわけである。

さらにマルクスは、資本とはなにか、どのようにしてそれは利潤の形成によつて増大するか、を考察している。経済学者は、資本を、「新たな生産のための手

段として役だつ蓄積された労働」(a. a. O., S. 76. 訳、
六六ページ下)と定義する。しかし、「ニグロはニグロ
である。一定の関係のもとで、彼ははじめて奴隷にな
る。紡績機械は糸をつむぐための機械である。一定の
関係でのみ、それは資本となる。」(a. a. O., S. 77. 訳、
六七ページ上)「資本もまた一つの社会的生産関係であ
る。それは一つのブルジョアの生産関係であり、ブル
ジョア社会の一生産関係である。」(a. a. O., S. 77. 訳、
六七ページ下)「直接の生きた労働にたいする、蓄積さ
れた、過去の、対象化された労働の支配がはじめて、
蓄積された労働を資本とする。」(a. a. O., S. 78. 訳、六
八ページ上)

それでは、「資本と賃労働とのあいだの交換では、
なにがおこるか? 労働者は、彼の労働と交換に生活
資料をうけとるが、資本家は彼の生活資料と交換に労
働を、労働者の生産的活動を、創造的力をうけとる。
そして労働者は、この力によって、彼の消費するもの

を補填するばかりでなく、蓄積された労働にたいして、
それが以前にもつていたよりも大きな価値をあたえる
のである。」(a. a. O., S. 79. 訳、六九ページ下)マルクス
はつぎのような例をあげている。「ある借地農業家が
彼の日傭人に、毎日銀貨五グロシエンをあたえる。こ
の銀貨五グロシエンにたいして日傭人は、終日借地農
業家の畑で労働し、それによって借地農業家に銀貨十
グロシエンの収入を保証する。借地農業家は、彼が日
傭人にわたす価値を回収するばかりでなく、彼はそれ
を二倍にするのである。」(a. a. O., S. 79. 訳、六八ペー
ジ下―六九ページ上)エンゲルスはのちに、マルクスが
当時、剰余価値がどこから、またどのようにして生じ
るかということを、きわめてよく知っていたことは、
『哲学の貧困』と賃労働と資本にかんする講演をみれ
ばわかる、といっている (Engels, Vorwort zum "Das
Kapital" Bd. II, S. 8. 長谷部訳、一五ページ)が、右の章
句はこれを証拠だてるものであろう。

「それにもかかわらず、当面に巨大な仕事がおおあった。」とローゼンベルグはいう。「すなわち、剰余価値の問題を完全に解決し、そのことによって、マルクス主義経済学全体の礎石をすえることである。」（前掲書、三二二ページ）「しかしすでにこの講演のなかで、第一の異案——剰余価値学説の真の中核——があたえられている。ここでは、リカード派社会主義者が考えていたように価値法則の侵害のうちにはなく、まさに価値法則にもとづいて、資本にたいする利潤（剰余価値）がえられることが、しめされている。」（同書、三二二ページ）価値論においても、剰余価値論においても、『賃労働と資本』は、マルクス主義経済学が一八四〇年代に到達しえた頂点をしめしているものであるといつてよからう。それ以上の前進は、一八五〇年にロンドンで再開される、マルクスの超人的な経済学研究にまたねばならなかった。

マルクスとエンゲルスによって、一八四〇年代にくりだされたプロレタリアートの立場にたつ新しい世

界観——弁証法的唯物論と史的唯物論、階級闘争およびプロレタリアートの世界史的役割の理論は、最後にこれを総括するとともに、一つの政党の綱領として実践の試練にかけられることとなった。いうまでもなく、一八四七年六月に創立された「共産主義者同盟」(Bund der Kommunisten)の綱領として、マルクスによって起草され、一八四八年二月に発表された、『共産党宣言』(Manifest des Kommunistischen Partei)である。

『宣言』は経済学的にみても、はじめて資本主義経済の全構造的把握をなしたとげたものであるが、ここでは行論の関係上、賃労働の本質にかんするつぎの一句にだけ触れておく。「彼ら〔プロレタリアート〕は仕事のあるあいだけしか生きられず、そしてその労働が資本をふやすあいだけしか仕事にありつけない。自分の身を切り売りしなければならぬこれらの労働者は、他のあらゆる売買される品物とおなじように、一つの商品である。したがってまた、おなじように、あらゆる競争の浮沈、あらゆる市場の変動にさらされて

る。」(MESA, Bd. I, S. 29-30. 邦訳、『二卷選集』第一卷、二九ページ下)ここでは、『商品たる労働』という命題が簡潔にあますとこなく解釈されている。」(ローゼンベルグ、前掲書、三六七ページ)のであって、賃労働は、労働者そのものが商品に転化するところの賃金奴隷制であることが把握され、しかも労働の販売とみえるものは、実は労働者の労働能力——すなわち労働力の販売であるという認識の萌芽をしめしているのである。(同書、同ページ参照)

九

以上われわれは、ローゼンベルグとともに、一八四〇年代におけるマルクス主義経済学の形成と発展を、価値・剰余価値論を中心として、その発端(一八四三、四年)から四〇年代末(一八四七、八年)までたどってきた。そこであきらかになったことは、いままでにみえてきたように、(一)エンゲルスとマルクスは、その最初の経

済学的労作『国民経済学批判大綱』と『経済学者——とくにリカード——からの抜粋にたいする評註』は、労働価値説を否定していたこと。(二)その理由は、彼らが当時、(1)私的所有と競争の支配下では、労働によつて規定される価値は市場価格のうちに発現しない、(2)利潤と地代も価格の構成要素となる、と考えていたためであること。(三)したがって以上の見解を克服するためには、(1)弁証法的唯物論の原則をしあげこれを経済現象に適用することによって、本質としての価値とその現象形態たる市場価格との弁証法的関連をつかむこと、(2)利潤と地代とを剰余価値として把握し、それが労働によつて規定される価値の一部分であるということを理解すること、が必要であったこと。(四)しかもなによりも、生産・労働が、人間生活の基礎であることをあきらかにした史的唯物論は、労働価値説の基本的前提であること。(五)したがって、労働価値説の否定から肯定に到達し、剰余価値学説の端緒をひらくことができた『哲学の貧困』、『賃労働と資本』のは、

史的唯物論の成立（『ドイツ・イデオロギー』）ののちであつたこと。などであつた。

そこには、いくつかのきわめて重要な問題がふくまれているようにおもわれる。まず第一に、すでにこれらのマルクス・エンゲルスの初期の労作のうちにあられては、価値の本質にかんする問題である。

これについてわたしは——『国民経済学批判大綱』『哲学のと貧困』の当該箇所でのべたように——社会的欲望におうじる社会的総労働の配分の法則を、価値法則の基底にある自然法則と解し、商品の価値はその物の有用性を前提とする抽象的・人間的労働によつて形成され、その価値の大きさは社会的欲望の存在を前提として生産過程において社会的平均的に必要な労働時間によつて決定されると解する。このような理解の論拠は、なかならず、後述の史的唯物論は労働価値説の必須的前提であるという認識にある。

第二に、マルクス・エンゲルスが最初から労働価値論者ではなく、一八四三、四年から四七、八年のうち

に労働価値説の否定からその肯定へ到達した事実があらからにされたことが、経済学史上においてもつ意義である。

いうまでもなく、近代経済学の最初の形態たる重商主義は、流通過程の表面的現象を、すなわち市場価格と讓渡利潤のみをとりあげた。その胎内からこれを批判して、生産過程の理論的考察が、すなわち労働による価値規定と剰余価値の端緒的把握——最初は現物形態での把握——が生まれ、それらはやがて古典経済学として体系化された。古典経済学は、理論的にいえば、労働価値論を基礎原理とし、剰余価値の科学的認識の萌芽をふくむ、経済学であるといふことができよう。

生物の個体発生は系統発生の縮図であるといふ（ヘッセルの法則）。人間が母胎内において原始生物以来の進化をくりかえすように、マルクス主義経済学もその胎児期において、三百年來の経済学史を、より高い理論水準においてくりかえしたのだ。そのことはむしろ、真に科学的な経済学の生誕のために必要な径路だ

つたのであろう。

最後に、史的唯物論が労働価値説の基本的前提であるということの意義である。

わたしは、古典経済学の労働価値説もまた、無自覚的に、生産・労働を人間生活の基礎とみる社会観を前提とするものであり、この意味でそれは「労働を原理とする経済学」(マルクス『経済学・哲学手稿』、訳、三三〇ページ参照)であつたと考へる。かくいへばただちに、その労働は使用価値を生産するところの具体的・有用的労働ではないか、と批判されるであらう。しかしながら、人間の自然とのあいだの物質代謝を媒介するところの労働が、具体的・有用的な側面とともに、抽象的・人間的労働としての側面をもち、価値を形成するところに、商品生産社会における労働の特質があるのではないだらうか。

さらに古典経済学が労働を経済の原理とみなしたことは、主体的には、それが広い意味の働く者の立場にたつていたこと、すなわちこの経済学がそのイデオ

ロギーであつた資本主義成立期の産業資本家階級が、貴族ないし地主階級にたいし、労働者階級をふくむ働く、生産者階級を代表していたことをしめすものであるといえよう。(白杉庄一郎『経済学史概説』上巻、一四二—三ページなど参照)

モーリス・ドップは、労働価値説の意義について、つぎのような独創的な意見をのべている。「労働が独特な意味での費用であるということは、もちろん、一つの仮定であつた。しかし、それは、なにが経済問題の本質であるかということについての、一定の観方からうまれた仮定であつた。したがつてそれは恣意的な定義ではなくて、現実の事象の本質的な姿を描写しようとする試みであり、究極においてはこのような試みの当否いかによつて判定されなければならない。総じて価値論というものは、それが『経済的』とよぶことに決定した領域の一般の形状および性格の暗黙の定義である。経済問題の核心は、この理論が主張したように、そしてまたそれ以前から伝統的にみなされてきた

ように、歴史の種々の段階における種々の生産形態のもとで、人間が自己の生活手段をうばいとするためにならう、自然との闘争にあつた。ペテイがのべたように、労働は富の父であり、自然はその母である。この関係においては、人間活動と自然過程とのあいだの対照は基本的であり、人間活動は変化と増大との主導者、産出者として、第一次的意義をもつていた。もしわれわれが経済問題について語るばあいには、経済問題の形式的性格ではなくてその現実的内容をしめし、経済的闘争が歴史の異なつた段階においてとつた種々の形態に共通ななんらかの要素を指示しようとするならば、労働と自然とのあいだのこのたえず変化しつづける関係やこの二つの要因のあいだの基本的対照を、決定的に重要な要素として包含しないで、いったいどのような叙述ができるのか、理解しがたい。また、もしわれわれがこの関係——人間の自然にたいする支配——にたいしてなんらかの量的表現をあたえようとするならば、(あるあたえられた社会状態のもとにお

いて) ある一定の結果をうみだすために必要な人間エネルギーの支出以外に、いったいどのような簡単な概念をもちいることができるのか、理解しがたい。」(Maurice Dobb, *Political Economy and Capitalism*, p. 19-20. 岡稔訳、政治経済学と資本主義、一八ページ)と。

わたしが、史的唯物論は労働価値説の必須的前提であるという論拠も、ドップの説くところにはちかひものである——ただし、価値を一つの仮定ないし定義であると見る見解はとらない——が、その学史的基礎づけは、別稿においてとりあつかいたいとおもう。

さていうまでもなく、真に科学的な経済学としてのマルクス主義経済学の大成は、一八五〇年代以降におけるマルクスの研鑽にかかるといふものである。しかしこの過程の精確な研究は、国際的にもいままでのところ未完成であるようにみえる。しかも一八四〇年代についても、われわれはローゼンベルグとともに、ようやく問題の所在をさぐりえたといふにとどまる。すべて今後を期するほかはない。